

---

# 馬人

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

馬人

### 【Nコード】

N5991Q

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

ガリバーが旅で来たのはフウイヌムという馬人の国だった。一見高潔に見えた彼等の現実。ガリバーにあったお話をアレンジしました。

## 第一章

馬人

ガリバーは何度目かの旅に出た。そうして辿り着いたのはだ。

「今度はこの国か」

「いやいや、ようこそ」

「ようこそ来られました」

随分と紳士的な態度の人々に出迎えられた。ただしその人々を人間と呼ぶべきかどうかガリバーはかなり躊躇ったのも事実である。服は着ている。人間の服だ。しかし顔は馬であり蹄もある。馬が立って服を着てだ。そのうえでガリバーに対して話してきているのである。

「人間の方ですね」

「そうですね」

「はい、そうです」

ガリバーは彼等にありのまま答えた。

「そして貴方達は一体」

「私達はフウイヌムです」

「自分達をこう呼んでいます」

やはり紳士的に彼の問いに答えてきた。

「ですから宜しければです」

「そうお呼び下さい」

「フウイヌムですか」

ガリバーはその呼び名を口だけでなく頭でも反芻した。

「それが貴方達の御名前ですね」

「その通りです」

「それでお呼び頂きますか」

「はい」

彼等の申し出に素直に頷いた。そうしてであった。

彼はフウイヌム達の生活に入った。その生活は優雅で気品がありしかも落ち着いたものだった。ガリバーはその生活にまずは満足した。

彼等の生活習慣も文化もガリバーの国と変わらなかった。フウイヌム達は実に知的であり理性的な者達だった。

ガリバーはその彼等に感銘を受けた。そうして彼等に対してこう言うのだった。

「貴方達は素晴らしいですね」

「素晴らしいですか」

「私達がですか」

「はい、とてもです」

恍惚とさえしている言葉だった。

「貴方達は素晴らしいです」

「そうですね」

「私達はそうは思いませんが」

「私達自身は」

しかしフウイヌム達は自分達ではこう返すのだった。その蹄の前足を手と同じように使って器用に紅茶を飲みながらガリバーに話す。

「別に」

「そうしたことは」

「そうですね」

ガリバーは彼等の言葉を信じなかった。

「私から見てです。貴方達はとても素晴らしいのですが」

「いえいえ、同じですよ」

「貴方達人間と変わりませんよ」

ところが彼等はこう返すのだった。

「何も変わりません」

「何もかもが同じです」

「いえ、貴方達は紳士的ですし理知的です」

これはガリバーが見ている彼等の姿だ。彼はフウイヌム達のその

高潔な精神性にこそ深い感銘を受けていたのである。

「それでどうして」

「では一つお話しますが」

「宜しいでしょうか」

「何のことをでしょうか」

「我々は貴方をこうして迎え入れてますね」

「このことをです」

そのことを話すというのであった。

「まず。ここに来られた人間の方は貴方が最初ではありません」

「過去にも何人かおられました」

「それで私が来ても驚かれなかったのですね」

ガリバーは何故彼等が姿の違う彼がこの国に来て驚かなかったのかわかった。それは過去に彼と同じ人間を見てきたからなのだ。

「最初是我々も驚きました」

「しかし何人とも御会いしているうちにです」

「驚かなくなりました」

そうだというのである。

「それでなのですよ」

「我々は貴方を迎え入れることができますのです」

「しかしです」

そしてだ。言葉に何か含まれてきた。ガリバーはそのことを感じ取った。

## 第二章

「最初に来た人間はです」

「我々によつて拷問されて色々言わされたうえにです」

「殺されています」

「馬鹿な、それでは」

その話を聞いてだ。ガリバーは驚きの声をあげた。あまりにも驚いたのでその手に持っているその紅茶を溢しそつになつた。

「我々人間と同じではないですか」

「はい、ですから同じです」

「同じなのですよ」

あらためてガリバーに話す彼等だつた。

「しかし何人も来られるうちにです」

「貴方達を受け入れるようになったのです」

「そして私もですか」

「若し貴方が最初にこの国に来られた人間ならばです」

「その時はです」

言葉に剣呑なものが宿る。

「貴方は死んでいたでしょう」

「私達に殺されていました」

「偏見ですか」

ガリバーはその殺される要因が何か口に出した。

「それによつてですね」

「それと無知によつてです」

「その二つによつてです」

その高潔だと思われる彼等によつてだ。殺されるといつのである。

「そつなつていたでしょう」

「間違はなく」

「左様ですか」

ガリバーはここまで話を聞いて唸る様に呟いた。  
「私はそうなっていましたか」  
「その通りです」  
「そしてです」  
フウイヌム達の話はさらに続く。  
「この国は多くの問題を抱えています」  
「私達の国だけではなくです」  
「貴方達の国だけではない」  
ガリバーは彼等の言葉のその部分に注目した。  
「といいますと」  
「我々フウイヌムも多くの国に分かれていまして」  
「互いに争っているのです」  
「そうだというのである。」  
「中には国内で争っている国もありますし」  
「実際に我が国も戦争中です」  
「馬鹿な、そんな」  
ガリバーはまた彼等の言葉を疑った。  
「こんなに平和なのにですか」  
「ははは、戦争は戦場で行われるものです」  
「普通は屋敷では行われるものではありませんよ」  
フウイヌムは笑ってガリバーに話した。  
「遠い国境においてです」  
「戦争が行われているのですよ」  
「左様ですか」  
ガリバーはその話を半ば呆然となって聞いていた。  
「そうだったのですか」  
「はい、そうです」  
「今度の戦争はかなり長く続いています」  
「戦争について具体的な話になっていた。」  
「何しろあちらの国の王位継承が絡んでいますから」

「それに我々が異議を唱えていますし」

「本当に同じですね」

ガリバーはその戦争の理由を聞いてまた呟いた。彼の国イギリスもまた他国や自国の王位継承に絡んで多くの戦争を経してきたからだ。王位継承によって生まれる利権を狙ったのである。

「それもまた」

「はい、犯罪も起きますし」

「例えばです。御覧になれますか」

「犯罪をですか」

「いえ、裁判をです」

それをだというのである。

「犯罪を犯せば裁判がありますね」

「ええ、まあ」

「それは私達の世界でも同じなのです」

こうガリバーに話す。

### 第三章

「ですからその裁判をです」

「そうですね。フウイヌムの裁判ですか」

「何も変わりはありませんよ」

フウイヌム達は静かな面持ちで彼に話した。

「人間の裁判とね」

「そうですね」

「御覧になればよくわかります」

「わかりました、それでは」

こう話してだった。そのうえでそのフウイヌム達の裁判を見るのだった。見れば裁判所も裁判席も弁護士も検事もだ。人間社会、それもガリバーのいるイギリスのそれとだ。全く変わりがなかった。

ガリバーもそれを見てだ。案内してくれたフウイヌム達に対して話した。

「あの、本当に」

「同じですよ」

「はい、同じです」

こうフウイヌムに対して述べた。

「全くです」

「我々も最初聞いて驚きました」

「これまでこの国に来た人間達にですね」

「あまりにも。貴方達の社会の裁判と我々の裁判がそっくりなので」

「それでなんですか」

「はい、それです」

彼等もまたガリバーに対して述べる。

「驚いたものです。しかも犯罪もです」

「そうですね。あのフウイヌムは」

ガリバーは被告人席にいるフウイヌムを見た。見れば馬相の悪い

フウイヌムだ。目が濁っていて表情もどす黒く見える。

「詐欺の常習犯ですね」

「前科五犯です」

「立派な犯罪者ですね」

「そして今回もです」

今回もだというのだ。

「捕まったのです」

「懲りない奴ですね」

「人間社会にもそうした輩はいますね」

「それも大勢」

ガリバーはありのまま答えた。

「います。犯罪者が特産品になっている程です」

「それは我々の社会も同じでして」

「おや、それについてもですか」

「刑務所はいつも満杯です」

半ば自嘲しての言葉だ。

「その種類も千差万別です」

「千差万別ですか」

「はい、詐欺だけではなくです」

その犯罪の種類も述べられる。それはだった。

「強盗に暴行、殺人にと」

「我々の社会と同じですね、それも」

「そういうことです。我々の社会にも犯罪はかなり多くあります」

「犯罪があるからこそ裁判もある」

「そういうことです」

こうだ。フウイヌム達はガリバーに対して淡々と話す。

「おわかりになられましたね」

「よく。そうですね、同じですか」

「全く同じ。戦争もやっていますしね」

「それではですが」

ここまで聞いてだ。ガリバーはまた言った。

「異端審問もありますか」

「異端審問ですか」

「はい、教会の教えに逆らっていると思われる者を裁判にかけるあれです」

ガリバーはこれが嫌いだった。異端審問においては欧州中において非常に多くの犠牲者を生み出している。欧州の歴史の汚点である。

「拷問も行いますか」

「ああ、あれですか」

「あれですかといえますと」

「はい、あります」

フウイヌムは当然といった口調で述べた。

「勿論です」

「勿論ですか」

「あれは大きな口では言えませんが」

語るそのフウイヌムの口調がだ。歪んだものになっていた。

## 第四章

「いいものではありませんね」

「ええ、非常に」

「我々の社会の汚点です」

「我々の社会でもそれは同じです」

「そうですね、全くです」

彼等はお互いに話した。

「全く。酷い話です」

「フウイヌムの社会もまたそうしたものには満ちていますか」

「そういうことです。おわかりになりましたね」

「はい」

ガリバーは彼のその言葉に頷いた。

「よく」

「我々は特に高潔な者ではありません」

「人間と同じですか」

「そうですね、全く同じです」

こう話す。

「同じですから。特別と思われません」

「特別とはですね」

「思われません。同じなのですから」

これが彼等の言いたいことだった。

「同じ社会なのですよ」

「そういうことです。我々が卑しいということも」

「我々が高貴ということもないのです」

「同じなのです」

また話す彼等だった。そしてだ。

裁判の判決が下された。するとその詐欺の常習犯の被告のフウイヌムはだ。その場で怒鳴り散らし暴れはじめたのである。

ガリバーはその光景も見た。そしてそれも見てこつ呷いた。

「人間でもああいっつのはいますよ」

「そうということですよ」

こんなことを話して見てだ。そのうえでフウイヌムの社会を見て回った。それは何処までもガリバーのいる人間の社会と同じだった。そうしてものを見てフウイヌムの国を去る。その時だ。

「それではまた」

「機会がありましたら」

「はい、また」

フウイヌム達の見送りを受けて今港から船に乗ろうとする。彼の船にだ。

「御会いしましょう」

「またね」

「また会おうね」

子供のフウイヌム達も来た。彼等は明るく前足を振っている。

「今度会ったらね」

「お茶飲もうね」

「あのお茶だね」

そのだ。紅茶をだというのだ。

「ミルクも入れてね」

「そうしよう」

「よし、そうしようか」

そんな話をしてそうしてだ。ガリバーは船に乗った。そうして彼の国に帰る。

見送りのフウイヌム達はだ。港からその彼に手を振る。

それはだ。やはり社会と同じだ。彼のいる社会とだ。

そして自分の社会に戻るとだ。彼の友人達が出迎えてきた。

「やあやあ、久しぶりだね」

「よく戻ってきたな」

「今度は何処に行っていたんだい？」

「ちょっとね」

ガリバーは微笑んで彼等の出迎えに応えた。

「僕たちと同じ人達に会っていたんだ」

「同じ？」

「同じなのかい」

「そう、同じだよ」

こう話すのだった。

「何もかもね。同じだよ」

「じゃあ今度は変わり映えのしない社会か」

「そういう社会なのか」

「いや、これがね」

「これが？」

「どうだったんだい？」

「面白かったよ」

笑って友人達に話した。

「我々の社会と同じでね」

「同じ？」

「同じでかい」

「うん、面白かったよ」

こう言うのだった。

「とてもね」

「同じで面白って」

「そういうものかな」

「いや、特に高貴な種族とか卑しい種族はないんだね」

だがガリバーはだ。いぶかしむ友人達に対してさらに話すのだった。

「そういうものなんだね」

「言っている意味がわからないが」

「とにかく君は楽しめた」

「それは間違いないと」

「間違いないよ。そういうことだから」

ガリバーはフウイヌム達と自分達を頭の中で重ね合わせていた。それはいい部分も悪い部分も全て含めて見事なまでに重なった。本当に何もかもが同じだった。違うのは外見だけだがそれはもう彼にとってには気にするまでもないことだった。そういうものだった。

馬人 完

2010・8・4

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5991q/>

---

馬人

2011年2月2日21時25分発行